北九州市立
文学館
Kitakyushu
Literature Museum

目次

第6号　2009.10.1

「現代俳句と戯作者」……1
第5回特別企画展……2
「生きた、書いた、愛した 女性作家の手紙展」
文学講座
瀬戸内寂聴さん講演会……3
「女流作家の手紙と日記」
平成21年度 夏の企画展……4
「佐藤さとる コロボックル物語展 だれも知らない小さな国」
村上勉さんおはなし会
コロボックルを作ろう！……5
親子で楽しむ小さな音楽会
佐木隆三館長と学ぼう！こどもペンクラブ……6
対談「自分史を語ろう」
明治学園中学校見学会
火野葦平「麦と兵隊」復刊……7
自主企画展「俳句雑誌 青嶺 百号記念展」
自分史ギャラリー「煤煙の街から」公開
交流ステージ・ワークステーション
北九州小文字ライオンズクラブ（作文コンクール発表会）
予告……8
資料寄贈者・提供者・受贈雑誌一覧

現代俳句と戯作者

館長　佐木　隆三

２００６年２月12日、第14回福岡県現代俳句大会がウェルシティ小倉九州厚生年金会館で行われ、わたしは「現代俳句と戯作者」と題して講演をした。今年の秋季特別企画展「横山白虹―上衣を肩にして歩く―」で特別協力いただく寺井谷子さんから、「どんな話でもいい」と頼まれたのでした。

そんなふうに言われても、まったく俳句のことはわからない。「世界で最短の文学」として、17文字に凝縮するのが、どんなに大変であるかは、むろん知っている。なにしろ小説家は、４００字詰め原稿用紙で1枚あたり幾らかの稿料をもらう。長ければ長いほど、実入りが良いのである。そんな戯作三昧の身としては、引け目を感じてしまう。ちなみに『広辞苑』に、「気楽な文章を書いて毎日を過ごすこと」とあります。

いったんは辞退したが、「私の番組に出演したでしょう」と押し切られた。確かに２００４年３月、寺井さんが選者をつとめる「ＮＨＫ俳壇」に、ゲストとして出演した。人様の句に感想を述べたあと、自作を披露することは知っていたが、ご愛嬌と思って引き受けた。とはいえ、当日が近づくと、ずいぶんなプレッシャーだった。たまたまオウム真理教の麻原彰晃こと松本智津夫被告が、東京地裁で死刑判決を受けた。このとき裁判長が、「悪の淵源」と断罪したから、わたしは法廷メモ帳に句作したのです。

汝は悪の淵源か、魂の脱け殻よ

スタジオで披露すると、寺井さんが「ムキですね」と評したので、わたしは「いいえ、死刑です」と応じてしまった。季題がないから「無季」なのに、「無期懲役」と取り違えたのである。まったく、生放送でなく録画撮りだから事なきを得た。そんな具合に慣れない世界で冷や汗をかいたことなどを話し、「現代俳句と戯作者」と題したのです。

横山白虹

▲第6回特別企画展
「横山白虹
―上衣を肩にして歩く―」

俳句雑誌『自鳴鐘』を創刊主宰し、現代俳句を牽引した俳人・横山白虹。生誕１１０年を迎える本年、小倉の地から清新かつ詩性豊かな俳句を発信した白虹の作品と生涯を展望します。

《主な展示品》
自筆句帖、自筆原稿、日記帳、書画、俳句雑誌「自鳴鐘」、竹下しづの女、橋本多佳子らより贈られた寄せ書き帳『波加太の灯』、松本清張からの書簡、遺愛の品など約１５０点

＊開催期間＝
平成21年10月24日(土)
～12月20日(日)
※月曜日休館[11月23日(月・祝)は開館、11月24日(火)は休館]
＊観覧料＝一般　４００円、中高生２００円、小学生１００円（年間パスポートは適用されません）

▲第5回特別企画展

「生きた、書いた、愛した 女性作家の手紙展」

4月25日(土)～7月5日(日)

宮本百合子、宇野千代らのほか、柳原白蓮、林芙美子など地域ゆかりの作家を含む、女性文学者25名を紹介する展覧会を開催しました。作家の息吹を伝える手紙に焦点をあて、そこにのぞく人生や創作活動について展観しました。

開会式には、林芙美子と一緒に暮らした姪の林福江さんも参加。思い出の資料を懐かしんでご覧になりました。

開会式より

展示資料＝約180点
入場者＝2669人
（イベント含む）

会場の様子

展示対象作家

・三宅　花圃（かほ）　・大塚楠緒子（くすおこ）
・片山　廣子（松村みね子）
・与謝野晶子　・長谷川時雨
・田村　俊子　・野上彌生子
・柳原　白蓮　・九條　武子
・生田　花世（はなよ）　・深尾須磨子
・岡本かの子　・杉田　久女
・素木（しらき）　しづ　・吉屋　信子
・尾崎　翠　・宇野　千代
・橋本多佳子　・宮本百合子
・壺井　栄　・大田　洋子
・林　芙美子　・佐多　稲子
・円地　文子　・矢田津世子

協力

財団法人　日本近代文学館

文学講座

5月23日(土)～6月20日(土)

文学研究者の方々を講師にお招きし、展示資料の背景など様々な角度からの解説をいただきました。定員をはるかに上回る申し込みに、関心の高さがうかがわれました。

萩原桂子さん

◎5月23日（土）
佐藤泰正さん（梅光学院大学特任教授）
「漱石の女性観　その作中・作外の女性像をめぐって」

◎5月30日（土）
萩原桂子さん（九州女子大学教授）
「明治の女性表現―三宅（田辺）花圃から樋口一葉への手紙」

◎6月6日（土）
狩野啓子さん（久留米大学教授）
「フィオナ・マクラウドに魅かれた女性作家たち―片山廣子と尾崎翠の接点」

◎6月14日（日）
瀬戸内寂聴さん（作家）
「女流作家の手紙と日記」
※特別講義として講演会を聴講

◎6月20日（土）
今川英子（北九州市立文学館副館長）
「昭和の女性作家たち―岡本かの子・林芙美子・宇野千代」

受講者＝延べ153人

受講者の声

◇ゆとりの時間ができ、少しでも文学にふれられてありがたく思いました。

◇それぞれの講師の先生の特徴ある講義内容、すばらしい図録、とても印象深いものでした。

◇夏目漱石、宇野千代以外の作家については、名前を聞いたことがある程度であまり知識がなかったが、これを機会に読んでみたいと思いました。

◇子育ても終わり、久しぶりに勉強してみようと思い、参加しました。知らないことを教えていただき、新しいものが自分の中に吸収された気がして新鮮でした。

◇埋もれていた女性作家を知ることができました。女性たちが封建的な社会の中でも生き生きと自分を主張していたことに目をみはる思いがしました。

瀬戸内寂聴さん講演会
# 「女流作家の手紙と日記」
6月14日(日)

本展の開催を記念し、作家・瀬戸内寂聴さんの講演会を行いました。「田村俊子」「かの子撩乱」をはじめ、女性作家のすぐれた評伝も多い寂聴さんに、その魅力を語っていただきました。

後半のQ&Aでは、参加者からさまざまな質問や人生相談が寄せられ、寂聴さんのチャーミングでユーモアあふれる回答に会場が魅了されました。

講演中の寂聴さん

私は今日、「女性作家の手紙展」を拝見し、とても懐かしく思いました。というのも、私がかつて評伝を書いた作家の多くがここに出ておりますし、直接書いてなくても、書くために、読み、調べなければならなかった人たちが本当にたくさん挙げられていました。ですから、私としては展覧会を見ただけで心が躍り、うれしく懐かしい思いがしたわけです。今日はどんなお話をしたら皆様に喜んでいただけるか考え、私のよく知っている人のことを話させていただこうと思います。（略）

伝記小説を書き出したころ、作品にした人に田村俊子があります。田村俊子は幸田露伴の弟子として小説を書き始めた人で、女優としても舞台に立つ、たいへんな美人でした。

彼女は日本の女性職業作家、第1号です。その前に樋口一葉という天才が現れましたが、一葉は自分の書くものでは食べられなかったし、病気を治すこともできなかった。天才だけれども、職業作家ではなかったのです。その点、田村俊子は原稿料、あるいは印税だけで、生活した女流作家の第一人者と言えます。

若いころ、露伴門下の兄弟子・田村松魚と恋愛、結婚し、佐藤の姓を田村と改めました。松魚はアメリカに留学した経験からフェミニズムを学び、自分もさることながら、妻の才能をもっと伸ばしたいと考え、彼女に小説を書かせます。俊子は夫の勧めで筆を取り、夫以外の男性に惚れる内容の小説を書いたりして、有名になります。

田村俊子は、非常に快楽的な人です。良い着物を着て、芝居を楽しみ、相撲を買う、といった生活ですね。藍前の札差の家に生まれ、贅沢に育ち、苦労を知りません。いわゆる江戸情緒が身についていて、才能豊か、日本女子大学へまで通って勉強した人、こういう人が女性作家の第1号でした。

その後彼女は、鈴木悦という若い新聞記者と知り合い、今で言う不倫の関係になります。ことが発覚し、相手の鈴木悦は日本に居られなくなって、カナダへ渡ります。左翼的な傾向のある鈴木は、カナダ在住の邦人労働者を助ける運動などを行いました。俊子はこのとき作家として全盛期を迎えていましたが、彼を追ってカナダへ飛びます。18年をそこで暮らすけれど、鈴木の死後、日本へ戻るんですね。浦島太郎です。

ところが、もはや誰も彼女のことを相手にしない。彼女自身も書けなくなっている。そういう状況の中、佐多稲子さんや宮本百合子さんなんかと仲良くなります。ところが、佐多さんの夫である評論家の窪川鶴次郎を誘惑してしまうのです。佐多さんを好きなのに、窪川さんとそういうことになる。さすがに彼女も悩み、恒かのつもりで北京へ飛ぶのですが、そのまま帰らないんですね。軍部との関係の中、北京から上海へ移り、「女声」という中国人女性向けの雑誌を出して暮らしました。

その俊子が死の2ヶ月前、佐多稲子に宛てた手紙が展示されていました。私も今度初めて見て驚いたものです。いわば恋敵、自分が奪ってしまった男の妻に出しているわけです。しかし、気取ったところがなく、とても普通の言葉で書かれています。

【手紙を朗読】

謝りたかったのでしょうね。これを書いて、2ヶ月の後に彼女は亡くなります。なんとなく死の予感がする手紙です。非常に短いけれども、私は拝見してきょっとしました。これを知っていれば、私は「田村俊子」の最後を書き換えたと思っています。

（一部抄）

北九州芸術劇場大ホール
参加者110名

参加者の声

◇熊本からはるばる来た甲斐がありました。一緒に来た母も喜んでいます。おかげさまで頑張れてきました。

◇「女性作家の手紙展」には3回通って、まだまだ見たりない思いがしておりましたが、今日のお話で、時代の根本的な考え方を知ることができました。

◇時間不足と感じるくらい、楽しい話でした。文学をとても身近に感じ、やはり本を読み続けて精進したい、というそう思いました。

▲平成21年度 夏の企画展

「佐藤さとる　コロボックル物語展　だれも知らない小さな国」

7月18日(土)～8月30日(日)

会場入り口

一杯になったメッセージボード

会場の様子

来場者と握手する村上勉さん

子どもたちの夏休みにあわせて、企画展「佐藤さとる　コロボックル物語展　だれも知らない小さな国」を開催しました。

身長わずか3センチの「コロボックル」たちが活躍する「コロボックル物語」シリーズは、児童文学の名作として、世代を越えて親しまれています。シリーズ第一作「だれも知らない小さな国」は1959年に発行され、今年はちょうど50年の節目の年にあたります。佐藤さとるさんの原稿などの文学資料や、村上勉さんの挿絵原画などを展示し、その世界をご紹介しました。

来館者に、葉っぱの形をしたメッセージカードを書いてもらったところ、みるみるうちに緑のじゅうたんが出来上がりました。期間中には、親子で楽しむことのできる様々なイベントも企画。いずれもとても盛況でした。

展示資料＝約150点
入場者＝3867人（イベント含む）

村上勉さんおはなし会

8月1日(土)

「コロボックル物語」シリーズほか、児童文学の挿絵や、絵本、装丁などの分野で長年活躍していらっしゃる画家の村上勉さんをお迎えしました。

村上さんが佐藤さとるさんに出会ったのは、上京して3ヶ月、美術学校に通っていた18歳のころ。当時、編集者をしながら童話を書いていた佐藤さんに、「絵を見せてくれないか」と言われたのが始まりでした。その時は童話というジャンルがあることさえ知らなかったといいます。

当初のコロボックルは、佐藤さんが描いたものを模写していたそうです。やりとりをする中で、少しずつ絵が変わっていきました。佐藤さんは、コロボックルに対してハチのイメージを持っていました。しかし、村上さんは、早く走ることやジャンプ力があることから、バッタをイメージし、大きな足や昆虫のような目をしたキャラクターを作り上げていきました。佐藤さんの書くリアリズムの文章には、絵描きが入り込むすきがなく、大変に苦労したとお話しくださいました。また、「コロボックル物語」の舞台は、多くの読者に歓迎されるように、日本全国どこにでもあるような風景に描いたそうです。

参加者が思い出の絵本として挙げた『ふしぎなふしぎなながぐつ』では、長靴の色を、佐藤さん指定の「青」から「黄」に勝手に変えたというエピソードも披露してくださいました。また、長崎から参加された方は、18歳の頃村上さんにファンレターを書き、いただいた返事のハガキを大切にして、自分の夢の支えにしたと、その内容を読んでくださいました。

50年読み継がれている「コロボックル物語」の灯を絶やさないように、これからも描き続けていきたいというお話に、参加者から大きな拍手が起こりました。

参加者＝82人

コロボックルを作ろう！
8月7日(金)

粘土を使って、コロボックルの人形を作る工作教室を開催しました。

北九州インターブリチーション研究会のみなさんを講師に迎え、まずは身近な北九州の自然についてお話しいただきました。イメージを膨らませたところで、製作開始。

工作に取り組む子どもたち

子どもたちは真剣な表情で自分の作品に取り組み、動物的なコロボックルの世界がいくつも出来上がりました。今にも動きだしそうなコロボックルたちがたくさんあふれ、子どもたちは終了時間になってもまだまだ足りない様子。またつくりたい！この粘土はどこで売っているの？といった声が相次ぎました。イベントを通して、コロボックル物語や工作に興味を持った子供たちもたくさんいるようでした。

残暑の中、館内には子ども達の歓声が響いていました。

参加者＝51人

参加した子どもたちの作品

親子で楽しむ小さな音楽会
8月27日(木)

響ホール室内合奏団のみなさんにご出演いただき、音楽会を開催しました。

第1部は室内楽の演奏、第2部はコロボックル物語の朗読と演奏をお楽しみいただきました。モーツァルト作曲の「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」第1楽章や、ヴィヴァルディ作曲の「四季」など、有名なクラシック曲のほか、「天空の城ラピュタ」の主題歌「君をのせて」などを演奏していただきました。楽員長でチェロ奏者の関原弘二さんによる楽器のミニ解説もあり、子供たちはみな熱心に聞き入っていました。

響ホール室内合奏団・仲紀子さん

第2部では、ブック・ネットワーク北九州代表の仲紀子さんに「だれも知らない小さな国」を朗読していただきました。合奏団による演奏や効果音によって、コロボックル物語の世界が表現されていました。

最後は観客の皆さんの声に答え、「蹄の上のポニョ」の主題歌がアンコール演奏されました。子どもたちも飛び入りで踊り、観衆の笑みを誘っていました。

参加者＝102人

来場者からのメッセージ

◇ 子どもの頃にコロボックルのお話を読んで、いろんな冒険をしていくのにとてもワクワクしたのを思い出しました。また、子どもと一緒に読み直してみたいと思います。

◇ 最初、娘さんの誕生日に自費出版で出されたというのは初めて知り感動しました。村上さんの描く日常の風景のリアルな描写は、コロボックルが本当にその辺りに居るんじゃないかと感じさせますね。

◇ 子どもの頃、本当にコロボックルがいるんじゃないかと思い、探したことを思い出しました。久々にコロボックルに出会えて懐かしく、ほのぼのとしたあったかい気持ちになりました。

◇ はじめてコロボックルを知りました。はじめて見たのにあってみたくなりました。

◇ ぼくも、コロボックルみたいに小さくなって空を飛んでみたいです。

メッセージを書く来場者

■佐木隆三館長と学ぼう！こどもペンクラブ

7月19日(月・祝)・26日(日)・28日(火)・8月9日(日)

佐木館長の「未来の作家を育てよう」との呼びかけのもと、今年も「こどもペンクラブ」を開催しました。

今年は文章講座、取材体験、作文発表の3日間で開催し、28人の小学生が参加しました。

1日目の館長による「文章教室」で、取材の方法や文章を書くコツなどを学んだ子どもたち。2日目には早速、取材に挑戦です。

今年の取材テーマは「海外について知ろう」。王家禄さん（中国）、サミュエル・エバンスさん（イギリス）、鄭智恩さん（韓国）、武奕玉さん（韓国）が、講師として来館。「未来の作家」である小さなインタビュアーたちからの質問に答えました。

3日目は、参加者のうち数人が取材をもとに書いたレポートを発表。それぞれの発見や驚きをまとめた瑞々しい文章に、講評を行った館長をはじめ、参加者同士でも質問や感想が活発に交わされました。

いくつかの作文は「毎日新聞」北九州版にも掲載されています。

参加者＝28人

修了証書を手に

サミュエル・エバンスさんにインタビューする子どもたち

■対談「自分史を語ろう」第10回

4月19日(土)

今回のゲストは、社会福祉法人「年長者の里」理事長芳賀晨壽（ましひさ）さんです。

対談の始まりは、明治時代に製塩所勤務に尽力した元・八幡村村長・芳賀福壽氏を曾祖父に持つ家系についてから。ご自身のお名前の由来などを交え、分かりやすくご説明くださいました。

そして、「社会保障研究会」を立ち上げ社会福祉の道に進むきっかけとなった大学時代の思い出。ここで学んだ「主義主張よりも、まずはニーズに応える」との教えは、高齢者福祉事業に携わる今につながっているとのこと。経済的に豊かになり誰もが長生きするようになった「幸せの結果」としての高齢化社会、その中での社会保障の現状と問題にも触れ、ご自身の経験や考えなどについてお話しされました。

ほかにも、社会福祉事業に参入するまでの様々な職業体験や教育委員長時代の裏話など、多彩な話題を親しみやすい語り口で披露してくださいました。

会場は現在の福祉の問題や政治・経済に至るまで、来場者との質疑応答などで賑いました。

参加者＝43人

佐木館長と芳賀晨壽さん

■明治学園中学校見学会

7月10日(金)

戸畑区の明治学園中学校から中学2年生約250名の皆さんが来館。同校は、本市ゆかりの芥川賞受賞作家・平野啓一郎氏の母校としても知られています。

当日はあいにくの雨模様でしたが、4班に分かれ、松本清張記念館と当館を観覧。

当館では館長の講話、図館長のミニ講座の後、2階の常設展示室を見学。北九州の文学者や文芸活動について学習しました。実際の展示や学芸員の説明をヒントに、次々と予めの設問に答えてゆく皆さん。積極的に質問し調査する中で、来館外や杉田久女など教科書で学ぶ多くの文学者が北九州とゆかりがあることを知り、驚いた様子でした。

見学終了後には、「実際に作品を読んでみたい」「また来たい」と、嬉しい声をたくさん聞かせてくれました。

参加者＝約250人

▲火野葦平「麦と兵隊」復刊

火野葦平の代表作「麦と兵隊」を、平成22年の没後50年を前に北九州市立文学館が復刊しました。

「麦と兵隊」は、日中戦争に召集された葦平が従軍日記をもとに執筆。戦地の兵士の表情を生々しく描き、「土と兵隊」「花と兵隊」とともに「兵隊3部作」としてベストセラーになった作品です。現在は文庫本も絶版となり、入手困難な状況が続いていましたが、皆様からのご要望とご遺族、関係者のご協力のもと、この度の復刊となりました。詩集「山上軍艦」も収録。

ただ今、北九州市立文学館内ショップおよびブックセンタークエスト小倉本店にて好評販売中!!（定価1000円・税込）。

また北九州市立文学館では、次の文庫本も販売しています。

ぜひこの機会に、北九州が輩出した偉才の作品にふれてみてはいかがですか。

「火野葦平 岩下俊作 劉寒吉 集」
（価格1000円）

火野葦平「糞尿譚」
岩下俊作「無法松の一生（富島松五郎伝）」
劉寒吉「翁」「阿蘇外輪山」

「林 芙美子 短編集」
（価格1000円）

「蒼馬を見たり（抄）」
「風琴と魚の町」「清貧の書」
「吹雪」「河沙魚」「晩菊」「骨」
「水仙」「下町」「夜猿」

「杉田 久女 句集」
（価格700円）

昭和27年に刊行された「杉田久女句集」を復刻

▲自主企画展「俳句雑誌 青嶺 百号記念展」

9月5日(土)～10月18日(日)

北九州を中心に活動する俳句結社「青嶺俳句会」発行の「青嶺」が、10月に百号発刊となるのを記念し、これまでの歩みと活動を紹介する展覧会を開催しています。

会場では、同人自筆の俳句作品のほか、句集や活動を紹介する写真などを展示しています。師系にあたる兒玉南草、野見山朱鳥の作品も特別に出品されています。地域の文芸活動を知っていただくとともに、俳句に親しむこともできる内容になっています。

会場の様子

▲自分史ギャラリー「煤煙の街から」公開

4月25日(土)～22年3月(予定)

展示の様子

今春より北九州市立文学館内「自分史ギャラリー」において、第8回（平成9年度）北九州市自分史文学賞で佳作・北九州市特別賞を同時受賞した中元大介さんの作品「煤煙の街から」を大型パネルにて紹介しています。戦後の貧しさと幾たびの挫折を乗り越え、青年が北九州に根をおろしていくさまを綴った作品です。作品からの抜粋と戦後北九州の写真、著者プロフィールなどを展示し、自分史文学の魅力を紹介しています。平成22年3月まで展示を予定しています。

▲交流ステージ・ワークステーション

北九州小文字ライオンズクラブ（作文コンクール発表会）
3月20日(金)

3月20日、先に中学生を対象に「おもいやり」をテーマに作文募集したコンクールの表彰式が行われました。

青少年の健全育成を目指し、北九州小文字ライオンズクラブが作品を募集しました。

当日、館長やライオンズクラブ関係者による表彰式の後、作品の発表会が行われ、皆、緊張した面持ちで自分の作品を朗読していました。

最後に館長らを交え記念写真を撮影。その頃には緊張も解け、笑顔で写真に納まりました。

予告

■文学講座

「横山白虹―上衣を肩にして歩く―」展開催に合わせ、横山白虹について学ぶ全5回の文学講座を開催します。

〈第1回〉
10月24日(土)11時～12時30分
寺井谷子氏（俳句雑誌「白鳥座」主宰・横山白虹門下）
「横山白虹というひと」

〈第2回〉
11月7日(土)13時～14時30分
田中九皆昌氏（北九州音楽協会会長）
「白虹先生と私」

〈第3回〉
11月28日(土)13時～14時30分
井上洋子氏（福岡県大学教授）
「横山白虹と『天の川』」

〈第4回〉
12月5日(土)13時～14時30分
岸原清行氏（俳句雑誌「青垣」主宰）
「横山白虹の俳句に学ぶ」

〈第5回〉
12月12日(土)13時～14時30分
小林恒也氏（梅光学院大学教授）
「横山白虹と現代俳句」

*会場＝北九州市立文学館1階 交流ステージ
*受講料＝2000円
（全5回／図録、資料代含む）
*お申し込み方法＝「市政だより」9月15日号をご覧ください。

■金子兜太氏講演会

演題「白虹さんの思い出」

「横山白虹―上衣を肩にして歩く―」展開催を記念して、生前の白虹と親しく交流していた俳人の金子兜太氏をお迎えし、講演会を開催します。

*日時＝平成21年11月15日（日）
13時30分～15時
*会場＝北九州芸術劇場小劇場
*お申し込み方法＝「市政だより」10月1日号をご覧ください。

金子兜太さん

■北九州市立文学館開館3周年記念

「森鷗外を語る　ベアーテ・ヴォンデ、伊藤比呂美」

文学館の開館3周年を記念し、森鷗外に関する講演と対談を行います。講演は石井郁男さん（北九州森鷗外記念会会長）。対談は「森鷗外の女性観」をテーマに、ベアーテ・ヴォンデさん（ベルリン森鷗外記念館副館長）と伊藤比呂美さん（詩人）が行います。

*お申し込み方法＝「市政だより」10月15日号をご覧ください。
*日時＝平成21年11月23日（土）
14時～16時
*会場＝北九州市立文学館

■企画展「小田宅子展（仮）」

収蔵品展「火野葦平没後50年展（仮）」

田辺聖子さんの小説「姥ざかり花の旅笠」のモデルになった江戸末期の筑前の大店の内儀・小田宅子が残した旅日記「東海日記」の世界を紹介。また、没後50年を迎える火野葦平の作品と生涯を、収蔵資料より展望します。

*期間＝平成22年1月5日（火）～4月11日（日）※月曜休館（月曜日が祝日の場合は開館、翌日休館）
*観覧料＝一般200円、中高生100円、小学生50円（年間パスポート適用）

平成22年度の予定

■第7回特別企画展

「橋本多佳子展（仮）」

小倉で俳句に開眼した後、近代女性俳句を代表する作家となった橋本多佳子のあゆみと文業を紹介します。

*期間＝平成22年4月24日（土）～7月4日（日）

◎寄贈者・受贈者・受贈雑誌一覧 平成21年3月末

寄贈者・投稿者

赤塚正幸　葦平と河伯洞の会　阿部サト子　阿部照子　石川安雄　今村元市　イメージクリップ　上高原博　梅山成子　大神誠　大西功　沖野邑江　尾上百子　柏木恵美子　神奈川近代文学館　金子香代　神社昌弘　岸原清行　北九州演劇会　木本信明　喜安琴　桑原真夫　鴻野布史子　小島吉晴　近藤晉平　坂谷正美　坂本旭　椎素猛　潮木守一　志村ユリ子　下川公一　謝里法　添田裕吉　関一雅　田原ツヤ子　徳島県立文学書道館　中原澄子　日本現代俳歌文学館　曽田宇太郎文学資料館　波佐間義之　八田昂　花岡隆三・美代　原賀いずみ　星野光伸　増田連　松井勇　村上勉　柳生じゅん子　山田きゆみ　与謝野昌子倶楽部　渡部節郎

受贈雑誌

青鬼　赤とんぼ　通信　穴生文芸　色鳥　海　沖　海峡派　牙　九州文学　群炎　玄海　沙流　鶏頭　自鳴鐘　人権の文化　川柳あやめ　川柳くろがね　川柳むらさき　たむたむ　小さい旅　天籟通信　柔殺火　虹野　俳句界　橋　ふだんぎ北九州文藝公論

（五十音順・敬称略）

北九州市立文学館
Kitakyushu Literature Museum

発行 2009年10月1日
北九州市立文学館
〒802-0013
北九州市小倉北区城内4-1
TEL. 093-571-1505
http://www.city.kita.fukuoka.jp

■開館時間
火～金 9:30～18:00（入館は18:30まで）
土・日・祝 9:30～18:00（入館は17:30まで）

■休館日
毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）
年末年始

0921074F